
勇者は魔王で人間で？

ハルジオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者は魔王で人間で？

【Nコード】

N9277Y

【作者名】

ハルジオン

【あらすじ】

一人の少年が学園に足を踏み入れる。それは本当はよくある『普通』の出来事のはずだった。だが、その少年は『普通』ではなかった。むしろ『普通』になれなかった。何故なら（血の繋がらない）魔神の子供にして（なりゆきで）魔王、しかも（偶然に）勇者だったのだから。

全ては未だ世に無く

「……なんと、汚らわしい」

『それ』を見た男は顔をしかめた。

「このような……このようなものが、我がディアヴール家の血を引く者とは」

冷えた部屋。

石を積んで作られた部屋を照らすのは赤い炎の松明。

男は、足元に平伏す女に視線を向けた。

その顔は赤く、怒りに満ち溢れている。

女は額を床にこすりつけかねないほど深く頭を下げていた。

「誠に申し訳ございません！」

女は、不自然なほど青白い顔をしていた。

体調が悪いのだと考えるのは当たり前だったが、男はそんな事を気にもしなかった。

そして女も、気にしないではいられない様子だった。

「当然だ。よりによって、銀だと？ 我がディアヴール家は代々金の髪と金の目、金冠の魔神様の恩寵を受けし柱の一つだぞ……」。

なのに銀？ 銀眼だと？ たとえ髪は魔神様に近い印である黄金だったとはいえ、銀は許されん」

「申し訳ございません！」

ずる、と額をこすりつける音。

血が出たのではないかと疑われるような音だった。
しかし女の声は悲痛だった。

男は台を見る。

石畳の部屋の床に、黒い色でえかがれた緻密な陣が敷かれていた。
ちょうど北の方角に、金色の石が置かれている。

その中央には白い台。

乗せられていたのは布に包まれた赤ん坊だった。

生後一ヶ月も無いのではないかというほどに小さく、肌も血に塗れている。

「このままでは我がディアヴール家は、ロウフェン家に魔神様の側に侍る権を握られたままではないか！ この売女が、悪魔の血を引く女が、家名に泥を塗りおつて！」

「申し訳ございません……申し訳ございません！！」

「グイネア家とはいえ許されんぞ！ 恥を知れ！」

男はそう言うってから、女を罵倒する言葉を荒々しく吐き散らす。

女は自分が、通常では考えられないような罵倒の言葉を受けても、
『自分が悪い』という様子を崩さなかった。

言われて当然、報いは受けるべき、という様子。

男は台に向けて手を差し出した。

「『溢れる水、走れ光。 我は金冠の魔神、煌月の恩寵受けし血を引く者』」

黒い陣、その模様を構成する直線、曲線、文字から青白い水が染み出す。

じわりと、だが陣を乱さない水は、陣の内側にのみ薄く満ちる。

「『此处に水鏡。 それは月を映す貴き鏡。 それは異なる場への

扉
」

水は青白く、発光。
黒い陣は金色の光に染まった。

「『此処に代償を。 代償は咎の肉、咎の骨。 いずれも捧げた代償』」

布 赤ん坊が、赤ん坊の右目が光る。
男の額に汗が滲んだ。
差し出した手が震える。

「『 今、扉は開いた 』」

身体のあるとあらゆる毛穴が開いた。

同時に鳥肌が立つ。
これは畏れた。

今から途方も無い、通常では見る事が出来ない奇跡が始まる。

そして陣の中から湿気た濃い緑の香り。
それは何処か獣臭く。

「『対象と代償は同列。 何を欠いても、同じ。 ただ運べ、運べ 運びたまえ！』」

光は、一瞬強く輝いた。
陣の中が見えないほどの強い光。
女は目を閉じる。

光が収まるのを瞼の裏に見て、女は目を開く。

「……ふん」

滴る汗を袖で拭いながら男は息を吐く。

男の荒い息が部屋に響く。

陣は光を放ってはいない。

最初とほぼ同じ状態。

だが、陣の中に台と金色の石はあったが、その上に乗っていた布と赤ん坊の姿は無かった。

まるで、最初からそこに居なかったかのように。

魔神は照れない

「素敵でございますわぁ！」

黒いワンピースと白いエプロンを纏った女が、歡喜の声をあげた。

そこは陰鬱さとは無縁の、真っ白な部屋だった。

鏡のように磨きあげられた床と壁。

敷かれた絨毯は赤く毛も深く、調度品は一流の手によるものに見えた。

「坊ちやま、素敵でございますのっ！」

胸の前で自分の手を絡ませ、頬を赤らめる。

そんな女は小麦色の肌に鮮やかな赤い髪と藍色の目をしていた。

「坊ちやまをこんなにも素敵に仕上げる事が出来て……私も本懷を遂げ、非常に嬉しく思いますわぁ……それと同時に自分の腕を誇りに思います」

「……ただ、ちょっと髪を梳かただけじゃないか」

目尻に涙を浮かべしみじみと語る女に、少年は軽く頭を掻いた。

少年の少し長めの銀色の髪が、瞼の上にかかる。

「どっちにしたって、色は変えるし……」

「それでもございます。私は、坊ちやまの容姿に磨きをかける事が生きがいなのでございます。つまり、坊ちやまがたとえ突然女になられたとしても、突然人間をお辞めになられたとしても、坊ちやまの容姿に磨きをかけますわ」

「そうじゃなくて……」

少年は自分の姿を見下ろす。

白いシャツに黒い衿、紺のズボン。

衿から通すネクタイは黒く、シャツの胸の辺りに剣と杖、そして盾を組み合わせた紋がある。

どれも新しく作ったものばかりに見えた。

少年の首には、金で作られた月のペンダントがある。

月は金、だが鎖は白。

少年の髪の色に合わせたかのような白だった。

「この名札」

少年が示したのは衿に付けられた青い名札。

流暢な薄い黄色の文字で少年の名前が記されている。

「俺、確か黒が良いって言ったはずなんだけど……」
名札の色は五色ある。

青に黄字の名札、緑に白字の名札、黒に白字の名札、白に黒字の名札、金に黒字の名札。

少年は黒に白字の名札を望んだはずだったが。

「私の独断により、青に変更しました」

「なんでさ!？」

「何故なら坊ちゃまは、黒より青と黄　　いいえ金がよくお似合いだからでございます。　月の金と夜と青……」

胸を張って女は言う。

「本当は金に黒字がよろしかったのですが、断られてしまいました」

「そりゃそうだろ……金五家しか使えない名札だから」

「それはとても不自然な事ですわ」

「自然じゃないか？」

納得がいかないように女は顔をしかめる。

「坊ちゃま、坊ちゃまは自分の立場を本当に理解されていますの？
坊ちゃまは金五家よりとても優れたお方、もっと金を身に付ける
べきお方です。もっと自分に誇りをお持ちくださいませ」

「持つてるよ、勿論、ちゃんとさ。でも凄いのは俺じゃなくて母
上で……」

「坊ちゃま」

真剣な眼で女は少年を見る。

そのあまりの真剣さに、少年は息を呑む。
今までとは放つ空気が全く違う……。

「母上ではなく、父上でございます」

その発言に、やや少年は沈黙。
そして。

「……え？ もう父上？」

少年の不思議そうな発言と共に、扉が開いた。
誰かの手によってではなく、勝手に。

「そう、今は父上だ」

豊かな低音がそこに響く。

そこに居たのは、絶世と言えるほどの美貌だった。

肌は陶器のように白く、肩まで伸びた波打つような髪はまるで満月
のような金色、目も全く同じ色に輝く。

汚れもすぐに目立ちそうな真っ白な衣服はまるでローブを重ねたか
のようで床を引きずるほど裾が長い。

少女が憧れる絶世の美を持つ騎士や王子とはまた違う　たとえば
支配者のような気配を持つ美貌の男だった。

その美だけで十分に権威の象徴。
誰もが跪ずき許しを乞うかのような。

男は少年を見るとゆるやかに口許を緩ませる。
……麗しい。

「やあ……息子。少しぶりだねえ」
腕を広げ素足のまま少年に近寄る。
素足だが、足音は一切しない。

エプロン姿の女は恭しく頭を下げると、道を譲るように退く。

「二日ぶり……父上」

少年はやや緊張したように答える。

「うん？　そうか、まだ二日か……」

男は少年のすぐ側に立つ。

少年の頭は、男の肩程度しかなかったため男は少年を見下ろす。

「背が、伸びたか？」

「まだ最後に会って二日しか経ってないのに、背が伸びるわけ、ない」

「む、そうか。昔は二日でこれほどは伸びたものだが」

『こんなに』と手で示したのは、幾ら成長期でも有り得ない幅だった。

「食べ過ぎで太っても、二日でそうはならないから」
「……難しいな」

大袈裟に男は考える。

「しかしたったの二日とは……、「俺」も無理をしたものだな。

何故かは考えずともよく分かるが」

「じゃあ、何故？」

「それは勿論……」

男は少年の顎に指を這わせる。

吐息すら聞こえそうな位置で囁きかけた。

「この父上である【俺】が息子の晴れ姿を見られぬなど……おかしな話だろう？」

「でも母上は最初届いた時に見てるから、父上も見た事になるんじゃないか……」

「我が眼で、直接見る事こそが最も意味があるだろう。違うか？」
もつと顔が近くなる。

唇が触れそうな距離だ。

溜息が出るくらいに、美しい。

「【父】と【母】は違う生き物だろう。ならば【父】と【母】はそれぞれ見なければなるまいよ。それとも、我が息子は【父】は嫌か？」

「そんな、父上を嫌いなはずが無いだろ！？」

「ならば父に見せよ、じっくりと髪の一筋一筋から足の爪先までをな」

ようやく顔を離れた。

だが男は、言葉通りに少年を嘗めるように眺める。

「……ふむ、此処はやはり親として子に何か言うべきなのだろう。……」

わざとらしく大袈裟に自分の顎に手を当て、口を開く。

「虐められた時は、【俺】の名を告げるがいい」

自信があるように男は笑う。

その笑み。

普通の人間……でなくても、たとえ同性でも、見惚れてしまうほどのもの。

「父上の名前は言ってもあんまり効果が……」

「……【俺】の名を告げてても効果無いだと？」

有り得ない事を聞いたとばかりに眉が上がる。

「いや、そうじゃなくて言っても信じないよ。普通の人間は父上

に会った事が無いし、普通の人間は相手が凄い人間じゃないかぎり父上を知っているだなんて思わないし……」

「分かん。お前はその『凄い人間』だろう」

「俺が金五家ならそうだって。でも俺は普通の人間として行くから、そう思わない」

「……人間は面倒だ」

それ以上、何かを考えるのを止めたらしい。

その少し悩んだような、憂いたような表情ですら麗しいとは最早異常。

異常な美。

異常美とでも言うべきか。

いいや敢えて異常美（ストレンジ・ビューティ）と言うか。

なんでもいいだろう。

とにかくこの美。

少年が今から行く場所にコレを越えるようなものは、一切無い。無いはずだ。

ちなみに目の前のこの男に並ぶ美貌の持ち主は、今までに五人しか見た事が無い。

いずれも麗しい存在だ。

性格は別として。

「……とにかくだ」

ポンと長くしなやかな指を少年の肩にかける。

「お前はこの【俺】の育てた息子。 お前の名誉は【俺】のもの、【俺】の名誉はお前のもの。 故にお前の名誉を貶る輩が居ようものなら【俺】の名を出しても構わぬ、何なら呼ぶが良いぞ、お前には許そう」

言葉は何処までも傲慢。

しかしそんな口調には確かに優しさはあり、愛情もあつた。

こんな言い回ししかしないような人物なのだから仕方ない……のか
もしれない。

「うん。 ありがとう、父さん。 俺、父さんに育てられて良かったよ」

少年は確かにその愛情を受け取っていた。
嬉しそうにはみかみながら言う。

「何を当然の事を。 お前の親はこの《俺》だ。 金冠の魔神たるこの《俺》の」
口調とは裏腹に少し照れたらしい。
腕を組み、少年に背を向ける。

「ちゃんと連絡するよ」

「当然だ。 でなければ、そちらに行くからな」
少年に背を向けたまま。

でもやはり少し嬉しそうに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277y/>

勇者は魔王で人間で？

2011年11月27日20時51分発行